

半世紀ごとの宿題



はらしま ふみお
原島 文雄

東京電機大学 学長/電気学会元会長

筆者は、東京大学生産技術研究所で30年以上きままな研究生活を送った後、1998年から、大学の学長というサラリーマン生活を送っている。それまで研究所勤務であり、海外を放浪する生活が長かったせいか、教育のことは無頓着であったのだが、急に思考内容が変わってきた。現在大学に在籍する学生のほとんどは、20歳前後であり、21世紀後半まで確実に生きていることに気が付き、教育の息の長さに驚くとともに、学生たちと100年単位のことについて考えることにした。その結果、現在から今世紀後半までの世の中の変化を以下のように予想している。

“高度経済成長社会が終わり、循環型社会への転換が始まっている。科学技術は、本来、人間の知的好奇心と豊かな生活を求めて始まったものであるが、実際には歴史的に戦争と資源浪費型経済成長の道具に使われてきた。その結果我々は多くの負の遺産を抱えこんでしまった。公害、地球温暖化、資源の浪費、核兵器、地雷などである。今後、人類は全力をあげて循環型社会の構築に努力すべきである。来たるべき循環型社会においては、資源・エネルギーの節約により人間の生活の質が下がると考えられるかもしれない。しかしこれは誤った考えである。人類は、循環型社会においてその価値観の変化に伴い新しい発展を遂げるであろう。循環型社会の構築は、人類がその生存をかけての戦いであり、これ自身が人間社会の目標ではない。むしろ循環型社会は人類の新しい文化の出発点になるものと考えられる”。

大学の学長として最も重要な仕事は、入学式と卒業式の式辞である。一年に2回しかないとはいえ、聴衆の真剣さに圧倒される。30年間以上やってきた大学の授業や学会の講演会などでは経験できない緊張感がある。それだけに当方としても準備に身が入る。以下の文章は、数年前の卒業式辞の一部である。

“50数年前、ちょうど1950年になったとき、私は小学校の4年だったと記憶しています。第二次世界大戦の末期に物心がつき、戦後の混乱期に育った私としては、ただのわんぱく小僧であったのですが、あるとき、やはり大学の先生であった私の父親が、つぎのようにいったのが印象的に思い出されます。

「今、ちょうど、20世紀の半ばである。おまえ達子供

は、50年後の21世紀まで生き延びるであろう。日本は戦争ですべて破壊されてしまったが、21世紀は、平和で戦争のない豊かな社会として迎えてほしい。」

正確な表現は覚えていませんが、このようなことをいっておりました。その当時、私自身がこの意味をどのくらい理解していたかはなほだ疑問ですが、いまになって私の親の世代が、自分の子供の世代に、どんなことを期待していたのか、痛いようにわかります。つい最近まで、私たちの世代は、すくなくとも日本では、平和で戦争のない豊かな社会を築いてきたと誇りに思ってきたのですが、この誇り、そして自信も我々世代がひきおこした環境問題の深刻さによって、かなり揺らいでいます。

—— 中略 ——

最後に、今世紀の半ば以降の時代、50年後の社会に向けて、皆様への期待を申し上げます。50数年前、私の親の世代が、戦争で破壊された日本を次の世代に残したことを詫び、次の世代が、平和で豊かな社会を築くことを期待したように、今、私どもの世代は、豊かな生活を追求するあまり、環境が破壊されつつある地球を次の世代に残すことをお詫びするとともに、皆様方に人類の叡智をつくして環境問題を解決し、21世紀の半ばまでには、美しい地球の上で、人類が知的なかつ健康な生活をおくれる社会を構築されることを期待いたします。”

親の世代から子の世代へ50年の単位で出された宿題は、一見成功したかに見えたが、さらに深刻な問題をひきおこし、形を変えて、さらに50年の単位でつぎの世代に引き継がれることになった。我々戦後世代は、なんとも無責任にみえるかもしれませんが、これでも一生懸命やってきましたつもりです。

最近、塩野七生著：“ローマ人の物語”を読んだ。なんとも長編で、読み終わるのに数か月かかったが、面白かった。われわれのやっていることは、ある意味でローマ人が千年以上繰り返してきたことであるが、大きな違いがある。ローマ人は、当時、地球上の文明社会の全体と見ていたかもしれないが、ローマが減びても人類は滅亡しなかった。今回の危機は、処理を誤ると人類の滅亡の可能性さえある。

若い科学技術者の活躍に期待します。